

教理研究院

サンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説の誤り(15)

サンクチュアリ教会およびUCI(いわゆる「郭グループ」)の言説の誤りを指摘してきましたが、今回は、彼らが批判する「お母様の無原罪誕生」について論じます。真のお父様は、「再臨主がこの地上で探される新婦は……墮落していない純粋な血統をもって生まれた方」であること語っておられます。これは、真のお母様の語られる「独り娘」のみ言が正しいことを裏付けるみ言です。

なお、これらの内容を総合的に理解し把握するためには、「真のお母様宣布文サイト (http://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をごらんください。

教理研究院

注、真のお母様のみ言や『原理講論』および教理研究院が発表した内容は「青い字」で、UCI側の主張は「茶色の字」で区別しています。

十九、独り娘(独生女)のみ言は真理である

無原罪誕生」を否定しようとし

(1)「真のお母様を地上世界から探し出す」というみ言をもって、「お母様の無原罪誕生」を否定しようとする誤り

家庭連合では、真のお父様のみ言を引用して「お父様が真のお母様を地上世界から探し出して復帰してこなければならぬ」と講義していますが、それに対しUCIを支持する人物は、お母様を地上世界から探し出すと

実についてです。再臨主の誕生についても、「再臨が、地上に肉身をもって誕生されることによってなされる」(『原理講論』577ページ)と論じられているように、人類歴史の終末期において、メシヤが再臨されるならば、この地上世界に「復帰されたエデンの園」が再現され、メシヤはそのエデンの園(地上世界)においてエバ(真の母)を探し出されて聖婚されるのであって、それゆえ「地上世界から探し出して復帰」するというみ言をもって、「真のお母様の無原罪誕生」を否定する根拠とはなりません。

(2)分派側の悪意のあるみ言の誤訳

ところで、小冊子『サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り・No.2』(19~20ページ)ですでに反論済みの内容ですが、今なお、分派側の人物が悪意を持って広めているために、

真のお母様宣布文サイトはこちらから↓



改めて以下、述べておきます。分派側の人物は、「皆さんはサタンの教会へ通っています。サタンの教会！お父様のみ言ではつきり語っていました。『真のお母様は墮落した天使長の血統から来ました』と語って、まるで真のお母様が原罪を持って生まれたかのように批判しています。しかし、これは、み言の誤訳、隠蔽に基づく批判であることに注意しなければなりません。

このみ言は、「真のお母様も墮落した天使長の血統を受けた人です」と翻訳すべきものであるにもかかわらず、彼らは「誤訳」しており、しかも、それに続く部分を削除(隠蔽)しています。正しくは、「真のお母様も墮落した天使長の血統を受けた人です。先生までも、そうです、先生までも。ですから、絶対信仰、絶対愛、絶対服従で再創造しなければなりません」(マルスム選集419-1102)とい

うみ言なのです。

はなりません。

真のお母様は、聖婚記念日と

『原理講論』176ページに

「マタイ福音書の冒頭を見れば、イエスの先祖には四人の淫婦があったということを知ることができる。これは万民の救い主が、罪悪の血統を通じて、罪のない人間として来られてから、罪悪の血統を受け継いだ子孫たちを救われるということを見せてくださるために記録されたのである」(573ページ)と論じられているように、救い主は、真の父も真の母も共に「罪悪の血統を通じて」生まれてこられることを述べているものです。しかし、救い主は「血統復帰」の摂理によって「罪のない人間(無原罪)として」地上に生まれ、そして「罪悪の血統を受け継いだ子孫」を血統転換されるのであって、「墮落した天使長の血統を受けた人」とは、そういう意味で語っておられるみ言なのです。私たちは「誤訳」に基づく彼らの批判に惑わされて

(3)真のお母様が語られたみ言は、「原罪なく生まれた独り子、独り娘」である

「原罪なく生まれた独り子、独り娘が、天の願いに従って小羊の婚宴を挙げた日」であると語っておられます。ここで語っておられる「小羊の婚宴を挙げた日」が、文鮮明・韓鶴子ご夫妻の「聖婚記念日」を指しておられることからすれば、「原罪なく生まれた独り子」とは文鮮明師のことを、そして、「原罪なく生まれた……独り娘」とは韓鶴子総裁のことを語っておられるのは明白です。

『原理講論』176ページに掲載された「み言の実体的展開による被造世界と復帰摂理表示図」を見ると、長成期完成級の線の上に「再臨主」と書かれています。これは「真の父」を意味しています。同じ線の上の横に「聖霊実体」と書かれています。これは「真の母」を意味するものです。「再臨主」と「聖霊実体」が、長成期完成級の上に記されていることは重要です。

天(てん)一(いち)国(こく)五(ご)年(ねん)天(てん)曆(り)三(さん)月(げつ)十(じゅう)六(ろく)日(にち)、真(まこと)のお母(はは)様(さま)は「天(てん)地(ち)人(にん)真(まこと)の父(ちち)母(はは)様(さま)ご聖(せい)婚(こん)五(ご)十(じゅう)七(しち)周(しゅう)年(ねん)記(き)念(ねん)式(しき)」を挙(あ)行(こう)さ(さ)れ、「し(し)か(か)し(し)き(き)よ(よ)う(う)、こ(こ)の(の)日(ひ)、万(ばん)難(なん)を(を)克(こ)服(ふく)し(して)独(ひとり)り(り)娘(むすめ)は……イ(い)エ(え)ス(す)・キ(き)リ(り)ス(す)ト(と)は(は)二(に)千(せん)年(ねん)前(ぜん)、原(げん)罪(ざい)な(な)く(く)生(な)ま(ま)れ(れ)ま(ま)し(し)た(た)。独(ひとり)り(り)娘(むすめ)も(も)、原(げん)罪(ざい)な(な)く(く)生(な)ま(ま)れ(れ)た(た)の(の)です。原(げん)罪(ざい)な(な)く(く)生(な)ま(ま)れ(れ)た(た)独(ひとり)り(り)子(こ)、独(ひとり)り(り)娘(むすめ)が、天(てん)の(の)願(ねが)い(い)に(に)従(したが)っ(つ)て(て)小(こ)羊(や)の(の)婚(こん)宴(えん)を(を)挙(あ)げ(げ)た(た)日(ひ)です。天(てん)に(に)と(と)っ(つ)て(て)は(は)栄(えい)光(こう)、人(にん)類(るい)に(に)と(と)っ(つ)て(て)は(は)喜(よろこ)び(び)と(と)希(ねが)望(ぼう)の(の)日(ひ)と(と)な(な)っ(つ)た(た)の(の)です」(『世界家庭』二〇一七年五月号、6ページ)と語られました。

すなわち、真のお母様が、公式の場で語っておられる「独り子、独り娘」とは、「原罪なく生まれた独り子、独り娘」を意味しています。

「聖霊は真の母として、また後のエバとして来られた方であるので、聖霊を女性神であると啓示を受ける人が多い。すなわち聖霊は女性神であられるので、聖霊を受けなくては、イエスの

前に新婦として立つことができ
ない」(265ページ)

「人類の父性の神であられる
イエスが来られて、**人類の母性
の神**であられる**聖霊**を復帰し、
めんどりがそのひなを翼の下に
集めるように、**全人類**を、再び
その懐に抱くことによって**重生
せしめ、完全復帰する**」(36
3ページ)

「モーセの路程で、イスラエ
ル民族を導いた**昼(陽)**の雲の
柱は、**将来イスラエル民族を、
世界的カナン復帰路程に導かれ
るイエスを表示したのであり、
夜(陰)の火の柱は、女性神と
して彼らを導くはずである聖霊
を象徴した**」(369ページ)

以上のように、『原理講論』
は、**聖霊を「女性神」「母性の
神」**等々と論じています。

ところで、真のお父様は、真
のお母様が還暦を迎えられた二
〇〇三年陽暦二月六日に、二度
目の聖婚式、そして**家庭王即位**

式をされ、次のように語ってお
られます。

「神様とアダムとエバは、『家
庭王即位式』をすることができ
ませんでした。……その『家庭
王即位式』をしたので、神様が、
本来の真の父母を中心として、
婚姻申告をすることができるとき
を迎えたということです。……

文総裁を中心として、(神様
は)婚姻申告をしました。今、
霊界に行けば……。今まで**霊界
では、神様が見えませんでした。
今、行ってみれば、霊界の父母
の立場で、文総裁夫婦の顔が現
れて、きらびやかな光で見える
ので、顔を見詰めることができ
ないほど、まぶしくなるという
のです。そのような霊界に行っ
た時にも、真の父母を否定しま
すか？**このように、はつきり
と教えてあげたにもかかわらず、
**神様を否定すれば、かちつと
引っかかります**」(『ファミリー』
二〇〇三年五月号、27ページ)

二〇〇三年五月号、27ページ)

から離れたりすることはありま
せん。彼らの批判は、非原理的
なものです。

真のお父様は、「お母様は聖
霊です。聖霊に背いては、**赦し
を受けられないのです**」(『真の
父母経』47ページ)と語ってお
られます。イエス様も、「聖霊
に対して言い逆らう者は、この
世でも、きたるべき世でも、ゆ
るされることはない」(マタイ
一二・32)と語られました。今
や、霊界において「**文総裁夫婦
の顔が現れて、きらびやかな光
で見える**」神様なのです。この
お父様のみ言に従うなら、真の
お母様に対し「**お母様を神格化
している**」「**お母様は既に墮落し
た**」「**お母様は本来の立場を離れ
た**」などと批判するのは、**か
ちつと引っかかる**言動になっ
ていると言わざるをえません。

②「**重生論**」から見たとき、真
のお母様は、**無原罪誕生**でな
ければならない

さらに、真のお父様は、「平
和メッセージ」で次のように
語っておられます。

「アダムとエバが……完成し
た上で、結婚して子女を生んで
家庭を築いたならば、アダムと
エバは外的で横的な実体の真の
父母になり、神様は内的で縦的
な実体の真の父母になったこと
でしょう。……**神様は、真の愛
を中心としてアダムとエバに臨
在されることにより、人類の真
の父母、実体の父母としておら
れ、アダムとエバが地上の生涯
を終えて霊界に行けば、そこで
もアダムとエバの形状で、彼ら
の体を使って、真の父母の姿で
顕現されるようになるのです**」
(『平和神経』54～55ページ)

このように、完成したアダム
とエバが霊界に行けば、神様は
そのアダムとエバ(真の父母)
の姿をもって顕現すると語って

「お母様に原罪があったら、
「いつ血統転換されたのか？」
が永遠の謎となる

『原理講論』の「終末論」に
は、「キリスト教が他の宗教と
異なるところは、**全人類の真の
父母を立てて、その父母によっ
てすべての人間が重生し、善の
子女となること**によって、神の
創造本然の大家族の世界を復帰
するところに、その目的がある
という点である」(161ペー
ジ)と論じられています。

全人類が「**重生**」するには、
必ず「**全人類の真の父母**」が立
たなければなりません。「真
の父母」になるには、**男性一人
でなることはできません**。そこ
には、**アダムの相対である女性
(真の母)**が必ずいなければな
りません。

真のお父様は、「**墮落**によっ
て)天の国の男性と女性、ひと
り子とひとり娘を失ってしまっ
たのです。ですから、救いの歴
史である**復帰摂理歴史**は、これ

おられます。二度目の聖婚式以
降、真のお父様は、神様につい
て、「**今、(霊界に)行ってみれ
ば……文総裁夫婦の顔が現れて、
きらびやかな光で見える**」と
語っておられます。すなわち、

神様は、お父様のお姿を通して
だけでなく、**真のお母様のお姿
をもつても現れる**というのです。
これが、二度目の聖婚式以降、
お父様が語っておられる、お母
様のお立場です。このみ言で分
かるように、お父様とお母様は、
それぞれ**完成したアダム、完成
したエバである**ということです。

分派の人々は、「お母様を神
格化している」「**お母様は既に
墮落した**」「**お母様は本来の立
場を離れた**」などと批判してい
ますが、**完成したアダムとエバ
は「決して墮落するはずはな
かった」という『原理講論』が
論じる「原理」(114ページ)
に照らし合わせると、真のお父
様と真のお母様のおふたりは、
もはや墮落したり、本来の立場**

を取り戻す歴史です」(『真の父
母経』26ページ)、「イエス様が
ひとり子だと語ったので、神様
は彼のためにひとり娘も送られ
たでしょう。神様の二千年の
(キリスト教)歴史は、**新婦を
求めるための歴史**です。イエス
様は、真の息子の姿で現れまし
たが、真の娘の姿がないので、
神様のみ旨を成し遂げることが
できませんでした。ですから、
二千年のキリスト教の歴史は、
**娘(独り娘)を求めるための歴
史です**」(同、69ページ)と語っ
ておられます。

また、『原理講論』も、「神は
アダムだけを創造したのではな
く、その配偶者としてエバを創
造された。したがって、エデン
の園の中に創造理想を完成した
男性を比喻する木があったとす
れば、同様に女性を比喻するも
う一つの木が、**当然存在してし
かるべき**」(97ページ)と論じ
ています。人類を「**重生**」する
に当たっては、必ず「**真の父**」

と「**真の母**」のおふたりがいな
ければなりません。

それゆえ、『原理講論』は、
「父は一人ですべての子女を生
むことができるだろうか。墮落
した子女を、善の子女として、
新たに生み直してください。真の母が
いなければならぬ」(264
～265ページ)と論じていま
す。

もし、真のお母様が、聖婚さ
れたとき初めて「**神の血統**」に
生み変えられたとするならば、
それは「**父一人**」で生み変えた
ことになるため、「**原理**」が説
く「**重生論**」と**食い違うこと**に
なります。それゆえ、お母様は、
聖婚される以前から「**神の血統**」
であったと考えるければなりま
せん。

もし、真のお母様が、ご聖婚
前には「**原罪**」を持っておられ、
「**サタン**の血統」であったとす
るならば、父は一人で生み変え
ることができないのにもかかわ

らず、お母様は、いつ、どのようにして、血統転換されたのか、永遠の謎となってしまう。

事実、父は一人で生み変えることができないために、真のお父様は「真の母」が立たれる一九六〇年まで、血統転換である「祝福結婚式」を一切、行ってこられませんでした。そして、「真の母」が立たれてからは、数多くの「祝福結婚式」を挙行していかれたのです。

真のお父様は、ご聖婚前から、真のお母様が「墮落する前のアダムと共にいたエバ」「墮落前のエバ」「墮落していないエバ」であるとして、次のように語っておられます。

「再臨の主が来られるときには何の宴会が催されると言いましたか。(「婚姻の宴会です」……婚姻の宴会とは結婚の宴会です。そうですね。(「はい」)こんな話をする異端だと大騒

ぎをします。(キリスト教徒は無性にねたましくなるのです。

婚姻の宴会、すなわち小羊の宴会をしようとするならば、イエス様の新婚が必要です。新婚を探し出さなければならぬのです。その新婚とは誰かというエバなのです。墮落する前のアダムと共にいたエバなのです。再臨の主は三人目のアダムです。イエス様は二人目のアダムであり、その後来られる主は三人目のアダムなのです。そして、三人目のアダムが墮落前のアダムの立場で来て、墮落前のエバを探し出さなければなりません。墮落していないエバを探し出して、小羊の宴会をしなければなりません。結婚して人類の父母となるのです(「祝福家庭と理想天国 (I)」584〜585 ページ)

このみ言に、「墮落前のエバを探し出さなければなりません。墮落していないエバを探し出し

て、小羊の宴会をしなければなりません」とあるように、真のお母様は、結婚(小羊の宴会)

をされたために、墮落前のエバ、墮落していないエバ、になったというではありません。それとは反対に、「墮落前のエバ」「墮落していないエバ」を真のお父様が探し出してから、結婚(小羊の宴会)をされると語っておられます。

真のお父様は、このように、真のお母様がご聖婚の前から墮落していないエバ、神の血統であられた事実を、明確に語っておられます。また、次のよう

「世の中に一つの真のオリブの木を標本を送ろうというのが、メシヤ思想です。しかし、真のオリブの木であるメシヤが一人で来てはいけません。……メシヤが一人で来ては、真のオリブの木になれないのです。メシヤとしての真のオリブ

を探すのです」と語られ、さらに「罪の因縁とは全く関係のない処女」であると語っておられます。

純粋な血統をもって生まれた方

を探すのです」と語られ、さらに「罪の因縁とは全く関係のない処女」であると語っておられます。

ここで、真のお父様が「罪の因縁とは全く関係のない処女」であると語っておられるのは極めて重要です。もし、真のお母様がご父様と「約婚」や「聖婚」をされることによって原罪を清算されたとするならば、お父様は「罪の因縁とは全く関係のない処女」と語られることはありえません。

真のお母様が語っておられる「独り娘」(独生女)のみ言は、真のお父様のみ言です。お母様が、お父様のみ言に反して、かつてに語っておられるのでは

ありません。お母様は、生まれ

ブの木と、メシヤの相対となる

真のオリブの木を中心として、これが一つになってこそ、真のオリブの木として役割を果たすのです(『永遠に唯一なる真の父母』68〜69ページ)

「原理は何をいつているか」というと、完全なるアダムが造られた場合には、完全なるエバが復帰されるというのです。完全なるプラスが現れた場合には、完全なるマイナスは自動的に生まれてくるようになっていきます。それは創造の原則です。……完全なる男性が生まれた場合には、完全なる女性が生まれるようになっていくことを、聖書では、女(エバ)はアダム(のあばら骨)によって造られたと象徴的に書いてあります(『御旨と世界』694ページ)

このように、真のお父様は、「真のオリブの木であるメシヤが一人で来てはいけません」と語られ、「メシヤの相対とな

れ、霊界におられるお父様と共に、神のみ旨の成就のために地上摂理の最前線に立つて歩んでおられます。

前述したように、真のお父様は、「今まで霊界では、神様が見えませんでした。今、行ってみれば、霊界の父母の立場で、文総裁夫婦の顔が現れて、きらびやかな光で見えるので、顔を見詰めることができないほど、まぶしくなるというのです。そのような霊界に行つた時にも、真の父母を否定しますか? このように、はつきりと教えてあげたにもかかわらず、神様を否定すれば、かちつと引つかかります」と語っておられますが、

真のお母様の独り娘(独生女)のみ言を批判し、お母様をおと

「再臨主は何をしに来られるのでしょうか。再臨時代は完成基準の時代であるために、再臨主は人類の母を探しに来られるのです。すなわち、新婦を探しに来られるのです。新郎であられる主がこの地上で探される新婦は、墮落圏内で探す新婦ではありません。墮落していない純粋な血統をもって生まれた方を探すのです。それでは、そのような新婦、すなわちその母とは、どのような基盤の上で生まれなければならない

再臨主が探される新婦(真の母)とは、「墮落圏内で探す新婦ではありません。墮落して

真のお父様と共に全てを勝利さ

と言わざるをえません。